

現代宗教研究セミナー

聖書と仏教

湯 田 豊
(神奈川大学教授)

序 論

私のテーマは「聖書と仏教」ということですが、きょうのお話は、できましたら旧約聖書のみならず、ヨーロッパの代表的な宗教であるユダヤ教、キリスト教、イスラーム、それから仏教、この四つくらいを中心に、「聖書と仏教」という基本的なテーマにつきまして、若干お話をさせていただきたいと思っております。

「聖書と仏教」というテーマですが、これは大変すばらしいテーマでありまして、仏教は聖書から外されています。仏教も聖書の中に入れていいのではないかという意見もありますけれども、聖書と仏教というふうに分けたことは、深い意味があると思われまます。

一

まず最初に、聖書とは何かということですが、とにかく宗教的なコミュニティーというものがあって、そこで多くの人によって生きる支えとみなされ、心から信仰されている神聖な書き物、ドイツ語で言うところのハイリゲ・シュリフテ

ン、英語で言うトスクリプチャー (Scripture) ということになるかと思ひます。

私は聖書を二つに分けることができると思ひます。一つはユダヤ教とイスラームであります。ユダヤ教の聖書はザ・バイブル (the Bible) で、キリスト教の側から言うト旧約ですが、あれはキリスト教の発想でありまして、ユダヤ教では自分たちの立場を古いと思ひていませんので、聖書ということになります。ただ、慣例に従ひますと旧約聖書ということになると思ひます。それと並んでイスラームの聖典コーラン (クルアーン al-Qur'an) があります。この二つが一組です。これに対して、もう一つはキリスト教で、キリスト教のバイブルは新約聖書。この二つの伝統があると思ひます。

まず旧約聖書——ユダヤ教の聖典は、一口で言うト「書物の宗教」ということでありまして、旧約聖書という名の一冊のブックがあつて、これが基本です。その一冊の神聖な書物について、モーセ (Moses) を始め、たくさん預言者と言われている人々が一冊の書物のメッセンジャーとして、神のメッセージを伝える。要するに、旧約聖書とイスラームは、一口で言うト一冊の書物が基本にございます。ただし、旧約の場合にはメッセンジャーとしてモーセを始め多数の預言者がおります。しかし、イスラームの場合には預言者は一人だけでありまして、すなわちマホメット (Mohammed) ということであります。

これに對しまして、キリスト教では新約聖書は非常に重要で、クリスチャンはだれでも新約聖書を神聖に扱つております。ただ、キリスト教の場合には、一冊の書物の宗教ではないと思ひます。なぜかと申しますと、イエス・キリストが中心であり、書物が中心ではないからなのです。新約聖書において神の言葉を語るイエス・キリストは、神のメッセンジャーボーイではなくて、神そのものであるということになります。キリスト教という宗教は、インド的な発想を用ひれば、アバターラ (Avatarā 化身、権化) の宗教と考えられてもよろしいかと思ひます。神あるいは神の言葉というものがあつて、それが肉となつた。つまり、それが人間の姿、形を帯びてこの地上に下つて

きたというわけですから、まさしくアバターラの宗教と考えることができるかと思えます。

ヘブライのバイブルは、一口で言うところスクリプチャー・レリージョン (Scripture religion) と申しますか、もしくは一冊の書物の宗教ということでありまして、信者は旧約聖書だけ持っていればよろしい。聖書の中で預言者はいろいろなことを言っておりますので、人々はその預言者の言葉 (神からのメッセージ) を十分に理解すればよいわけです。

そして、旧約聖書の中で一番大事なことはトーラー (Torah 神の教え) です。これがキリスト教では誤解されまして、キリスト教の偉大な使徒セント・ポール (聖パウロ) が、トーラーを「律法」と訳しました。これは間違いでありまして、律法という語はギリシア語のノモス (Nomos) に由来します。パウロはユヤダ人なので、ヘブライ語ではできたはずで、どうしてこのような間違いを犯したかわかりません。ただあの方はギリシア語が堪能でありまして、ギリシア語でしゃべり、ギリシア語で書いたわけです。やっぱり人間というのはある一つの言葉が堪能になりますと、ほかのほうはダメになるみたいであります。そんなわけでありますので、なぜかわからないけれども、パウロが大きなた過ちを犯した。それが現代まで伝わっております。

実を申しますと、ユダヤ教の場合にはトーラーというのは「律法」ではなくて、「教え」という意味です。人生百般に関する神の教え——これがトーラーでありまして、英語に訳しますと、それはティーチング (teachings) を意味するのです。

それから、イスラームの場合にはコーランですが、これはマホメットが聖ガブリエル (Gabriel) の啓示を受けて、靈感によって神すなわちアッラーの言葉を我がものとし、これを人々に伝えたということであります。

新約聖書の場合には、たった今申しましたように、アバターラ・レリージョンというわけで、神は肉になったと考えることができるのであります。

聖書といいますが、ヨーロッパの場合には二つに分けたほうがいいと思います。一つは一冊の書物、片方はキリスト教の聖書観であります。キリスト教におきましては聖書そのものよりも、むしろイエス・キリストという人格が中心なのです。イエスは人間でしかも神であるということになっていきます。人間であると同時に神だという信仰が、要するにキリスト教の基本であります。聖書と言う際、このように二通りにお考えになったほうがいいと思います。

ただ、問題になるのは、仏教をどう扱うかということです。この問題で私は非常に困るのです。とにかく、ユダヤ教といいますが、最終的には旧約聖書があればよろしいのです。もちろん、それ以外にタルムード (Talmud) とか、その他たくさんありますけれども、最終的には旧約聖書があればよろしい。キリスト教も膨大な文献があります。最終的には新約聖書に帰ればよろしい。イスラームの場合には、何といったってコーラン (クルアーン) だろうと思います。

このように、ヨーロッパの代表的な宗教の場合、一冊の本があれば全部わかるわけです。ところが仏教になりますと、皆様ご承知のように、本当に困るのであります。この一冊と言われるのではないのでしょうか。

そこで話を戻しますが、ヨーロッパの場合にはバイブルもしくはスクリプチャーというものがあり、我々はこれを二つの伝統に分けて考えることができるかと思えます。

一一

さて、仏教をどのように分類するかということですが、結論は出ないので、お話をしながら皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

まず小乗仏教の場合、三蔵 (トリピタカ Tripiṭaka) があります。これを小乗仏教のバイブル、小乗仏教の聖典と言うことができるかと思えます。ところが大乘になりますと、この一冊と言われますと果たしてあるかどうか

らない。

ユダヤ教およびイスラームの伝統は一冊の書物の宗教でありまして、その中で活躍するヒーローは預言者たち、もしくはマホメットです。ヨーロッパの書物の宗教の場合にはあくまでもゴットがあって、神の啓示、神の意思を媒介する存在が預言者だということになると思います。

しかし、仏教の場合にはお釈迦さんは神の啓示を伝えるメッセンジャーではなく、自らの力で悟りを開いた人ですから、どうもこの伝統に組み入れることはできないだろうと思います。この意味から申しますと、ユダヤ教、イスラーム教の中にトリピタカを入れることを私はためらうのです。

それに対して大乘仏教の場合ではありますが、大乘仏教の仏陀は小乗のお釈迦さんと違ひまして、いろいろ難しい問題、例えば三身説とか化身論とかあります。それはあくとして、一口で言うとお釈迦さんの仏陀というのはアバターラーではないかと思えます。つまり、その限りではキリスト教のイエスとかなり近いのではないかと考えます。

ただ、キリスト教の場合には、神もしくは神の言葉、ロゴス (logos) が肉となったというわけですが、大乘仏教の場合には、簡単に言うとお釈迦さんがあって、それがたまたまこの地上に人間の姿、形をとって降下したと考えられれば、大乘仏教はキリスト教と同じ第二のグループに入れることができるのではなからうかと思うわけです。

そうは言っても、果たしてそれでいいのかと言われますと、私は全く自信がないのでありまして、キリスト教と大乘仏教は非常に違っておりまして、これを一つのグループにすることについては、ちょっと問題があるかと思えますが、やはり第二のグループに無理やり押し込んでみようかと思いません。

ただ、二番目に押し込もうとするのですけれども、また新しい問題が起きてくるので非常に困ってしまいます。なぜ困るか申しますと、イスラームは書物の宗教であります、コーランは単なる書物ではないのです。コーランは旧約聖書と少しばかり違ってきます。旧約聖書の場合には単なる書物でありまして、小乗仏教のトリピタカに近いと

思います。ところが、イスラームのコーランの場合にはちょっと違います。コーランを一心不乱に声高らかに読誦することによって、神の恵みが与えられ、神の力を授かるというわけです。

コーランのチャプター——これをアラビア語でスーラと言います。これは第一章から百十四章までありますが、スーラの二十九、詩節の五十一には次のようにあります。

われわれがあなたに啓典を下し、あなたはかれらに読誦する。かれらにはそれで十分ではないか。本当にその中には、信仰する者への慈悲と訓戒がある。

このイスラームの聖典コーランは、大乘仏教經典に非常に近いと思います。

釈迦に説法になりますけれども、大乘仏教經典は一体何かということが問題です。大変優秀な学者やお坊さん、あるいは仏教評論家の書いた般若心経の本を読んで、どうも腑に落ちないことがあります。と申しますのは、般若心経というよりも、むしろ般若心経によって代表される大乘仏教經典と言ったほうがよろしいかと思いますが、あの經典を扱う際に、彼らは一番基本的なことを落としているのではないかと思われるからなのです。

私の解釈によれば、大乘仏教經典 (Mahayana Sutra) の一番いいところは、大乘經典を読誦あるいは書写することによって、当然、それを読誦する信仰篤き人々に呪術的な力が授けられることに違いない。まさに大乘仏教經典こそは、何とも言えない超越的なエネルギーの集合点ではないかと思えます。写経にしましても、あるいは読誦にしましても、本当に信仰心を持って行うならば、もろもろの危害から守ってもらおうとか、病気が治されるとか、おのれの願望が成就するというように、一口で言うとな乗仏教經典の中に呪術的な価値があるのではないかと思えます。そうしますと、イスラームの立場に大乘仏教經典は接近するのではないかと思えます。小乗仏教のトリピタカの場合には、内容だけで判断されますので、旧約聖書に近くなってきましたが、コーランの場合には大乘仏教に近づくのではないかと考えられます。

そうしますと、どうも私が最初に挙げました二つの伝統的なバイブル観——単なる書物および書物の中にひそんでいる神自身、アバターラーが問題だという分類が当たっているかどうかということについて、どうも自分でわからなくなってくるのであります。そういう疑問点を持っておりますので、少し申し上げたわけです。

参考までに「聖書」という言葉ですが、この中に聖パウロの書簡がありまして、ローマ人への手紙の第一章第二節に、

この福音は、神が、預言者たちにより、聖書の中で、あらかじめ約束されたものであって

と、この辺に「聖書」という言葉が出てくるわけです。この「聖書」という言葉が本日の私のテーマですから、私はこだわるのですが、これはキリスト教的な発想ではないかなと思います。

仏教の聖書といったら何があるかということになりますと、小乗の場合には、一応、私はトリピタカと考えております。トリピタカの中でも幾つか我々に知られている代表的なものがあるわけですが、そういうものを小乗仏教のバイブルと考えてみたいと思っております。

大乘仏教の場合、法華経なんかは一番ですね。もしもスクリプチャーというものが大乘仏教にあるとすれば、まずサツダルマ・プンダリーカ・ストラ、あるいはプラジュニヤ・パーラミター・ストラ（般若波羅密経）、華嚴も入るでしょうけれども、私が考えますにはプラジュニヤ・パーラミター・ストラとサツダルマ・プンダリーカ・ストラの二つ。この辺が大乘仏教の聖書と言えるかどうかかわからないけれども、一応、ストラというものがヨーロッパの聖書にあたる言葉ではないかと思えます。シャーストラの場合には問題ないですね。これは龍樹とか世親なんかの書きました単なる学者の論文ですから、これは聖典には入らないと思えますが、ストラの場合には少し違うのではないかと考えるわけでありまして。

ただ、サツダルマ・プンダリーカ・ストラという言葉が出ましたが、この場合でも実は疑問点があります。それ

は、キリスト教の場合には、アバター宗教 (avatara religion) ということができると思いますが、これは初步的な疑問でありまして、法華経とは一体何だということが問題になるわけです。法華経における仏陀というものは、宗教学的に申しますと化身 (アバター) と考えていいのか、あるいはそうではなくて別のものなのか。つまり法華経の中の仏陀というのは、生身の存在ではなく、応身とでも言うのでしょうか、そういうものであつて、法身のみが真実であるということなのか——そのところが私にはよくわからないのです。

法華経の仏陀の性格づけをどうするかということを私はいつも考えていて、結局わからなくなってしまふのですけれども、一つ考えられることは、法華経のみならず大乘仏教の仏陀——諸仏ということなんでしょうが——は、最終的に普遍的な救済者、救い主と考えることができるかなと思います。

そうしますと、我々が目の当たりにする仏陀というものは、かりそめの姿なのか、本当に存在するのか。例えば、時間、空間、因果律を超えた超越的な存在、超越仏である。その超越仏が教育上の目的をもって、この地上にみずからを応身として投影、投射したにすぎないと取るか——そのところが、大変問題が込み入ってくるわけでありまして、ですから法華経の場合、仏陀をどのように解釈するかということが問題なのですが、宗教学的には単純かつ明快といえますか、法華経の中の仏陀は超越仏であつて、この超越仏は生きとし生けるものの救済主である。そして、法華経はストラそのものであるということになっております。

先ほど申しましたけれども、大乘仏教經典の中から法華経を選んで、これを大乘仏教の代表的な聖書とみなすという考え方は大変危険かもしれません、そういうことが許されるかどうかわかりませんが、私はそんなふうにしていいのではないかと思っております。しかし、学がないものですから、私はそこまで踏み切れません。そういう考え方だけを申し述べておきたいと思っております。

今申しましたような聖書は、旧約聖書、新約聖書、コーランの三つです。仏教の場合トリピタカと大乘仏教経典になりませけれども、私はトリピタカに限って触れてみたいと思います。といいますのは、大乘仏教経典は大変難しく、なかなか簡単には扱えないからです。もっともと大乘仏教を勉強しなければいけないと思っております。

本論

まず我々は、聖書の中の骨組みと申しますか、ストーリーを理解すべきではないかと思ひます。そうしないと Bibel もしくはスクリプチャーの持っている意味がわからないと思ひます。

ユダヤ教の場合、キリスト教の場合、それからイスラーム教の場合、最後に仏教はトリピタカのことになりますけれども、その辺について少しばかりスケッチを試みてみたいと思ひます。

これにつきましては、私の『宗教とは何か』という本を参考にしながら、お話をしたいと思ひます。

一

まず最初に旧約聖書のお話を若干したいと思ひます。

ご存じのように、旧約聖書のストーリーはアダムとイブから始まるわけですが、歴史性に乏しいので、もう少し歴史的に実在したと思われる人物のところから述べたいと思ひます。

アダムとイブの後裔であるアブラハムという人がおります。これが始まりです。旧約聖書では、最初「アブラム」と言っていました。間もなく「アブラハム」と変わって、奥様がサラといいます。最初は「サライ」と言ひ、後

に「サラ」と変わってきます。イスラエルの物語はアダムとイブではなく、アブラハムとその妻のサラから始まると考えてよろしいかと思えます。

この物語はユダヤ教の本質を生き生きと我々に伝えてくれるのではないかと思えます。この物語はノアの箱舟の後あたりから始まるわけですが、ノアによって新しく人間が作り変えられるわけです。

アブラハムとサラは最初のユダヤ教徒ですが、この二人が神に愛されまして、父の家を離れて、父の示す土地に行くわけです。そのときに神様ヤハウェ（エホバ）はアブラハムを祝福して、おまえたちにたくさんの子孫を授けよう、そして、その子孫が豊かな土地で幸せに長生きをして暮らしていくようにしてあげましょう、と約束をするわけです。そして、おまえたちに一人の男の子を授けよう、その男の子がやがてイスラエルの希望になる、と神は言います。その男の子の子孫は、天の星あるいは浜辺の砂のようにふえると神は約束します。

創世記の第十八章には、こう書かれています――

さてアブラハムとサラとは年がすすみ、老人となり、サラは女の月のものが、すでに止まっていた。

それでサラは心の中で笑って言った。「わたしは衰え、主人もまた老人であるのに、わたしに楽しみなどありえようか。」

主はアブラハムに言われた。「なぜサラは、わたしは老人であるのに、どうして子を産むことができようかと行って笑ったのか。」

奥様のサラはかなりの高齢で、旦那さんが百歳近くでありまして、子供なんかできるはずはないと、奥様は心の中で笑ったのだけれども、神の知るところとなり、神様はそう言って怒るんです。サラは、

「わたしは笑いません。」

主は言われた。「いや、あなたは笑いました。」

ここで注意していただきたいことは、「あなたは笑ったでしょう」「私は笑いません」と神と人間がごく親しく対話していることです。これがユダヤ教の本質です。ユダヤ教の本質は、信仰ではなくて信頼。信頼というよりも、むしろ親密さの中に求められます。神と人間との交友。なれなれしい、本当に親しい関係というものがユダヤ教にはあります。このような神と人間との親密さがイスラエルの物語の原点にはあるわけであります。このことが非常に印象的です。

ところが、これには後日談がありまして、サラにイサクという男の子が生まれます。このイサクからヤコブが生れ、ヤコブから何代か後にダビデが生まれる。かくしてユダヤ教は広まっています。

アブラハムとサラに一人息子のイサクが生まれます。ところが神は大変意地が悪くて、アブラハムを試します。

神は一人息子のイサクを自分に犠牲として捧げるように命令します。薪を積み重ねてその上にひとり息子を乗せ、火をつけて焼き殺せと、神はアブラハムに命令するわけであります。アブラハムはそうしようと思いましたが、結局、最後に神はそうしなくてよろしいと言ってイサクの命を救います。

これはキリスト教との関係で非常に重要な箇所です。キリスト教の場合には、ヨハネによる福音書にあります。神はそのひとり子を賜わったほどにこの世を愛してくださいと「この世を愛してください」というのがキリスト教でありまして、ご存じのように、神のひとり子は十字架にかけて殺されてしまったわけです。神殺しが実行されたわけです。神殺しはヒューマニスティックであるとは言えないのであります。キリスト教の場合にはイエスを犠牲にするという血の儀式は、救済の不可欠の条件であるということが言えます。ユダヤ教の場合には違います。その寸前までいきますが、最終的に人間の命を奪うということはよくないことである。血の儀式は悪いということでありまして、これを思いとどまったということでもあります。ここに実はユダヤ教のルーツが隠されているのです。

旧約聖書の中のモチーフで非常におもしろいのは、父と息子の愛でありまして、これが旧約聖書の愛の原型なので

す。旧約聖書には母親と娘の関係はないのです。

神に一人息子を捧げるとき、父はどんなに心を痛めたか、どんなに苦しんだかわからない。薪を息子に背負わせて二人で坂を登って山に行く。息子が言います。「お父さん、私は背中に薪を背負っているけれども、一体何に使うんですか」と。それに対して父親は一言も答えない。私も人の子の親ですからよくわかるけれども、それが愛というものではないかと思えます。何も言わなくても通じるのが愛です。

私はあまり勉強していませんけれども、法華経を読んでおきますと、お釈迦さんの愛の対象は息子です。

さて、もう少しユダヤ教の物語を続けますが、イサクはやがて結婚しまして、リベカという人を奥さんにします。

『レベッカ』という典型的な悪女の小説がありましたね。リベカはどうしようもない悪い母親で、エサフとヤコブという二人の息子が生まれたのに、次男坊がかわいくて長男が憎たらしい。結局、長男を追放して、弟のヤコブに家督を継がせます。非常に悪知恵にかけた女性です。

ヤコブは大変な豪傑でありまして、神と相撲をとってうち勝ったというのです。だから、創世記の中にありますが、あなたはもはや名をヤコブと言わず、イスラエルと言いなさい、あなたが神と人とに、力を争って勝ったからです。

というわけであります。私はヤコブが好きですが、ヤコブが家督を継ぐやり方がどうも卑劣であったということが言えるかと思えます。

イスラエルという言葉は、神と争って勝った者という意味であります。ユダヤ教の根底にあるのは、人間は神といさかきをして、みずからのことを主張する強烈な意思であります。イスラームのように、神の意思に盲目的に服従するという宗教ではなくて、たとえ相手が神であろうと、自分が正しいと思ったことは胸を張って正々堂々と主張する。そういう宗教がユダヤ教であります。

イスラエルの物語はアブラハムとサラ夫婦と神との関係から始まりますが、結局、イスラエルの宗教の基本にはトーラーがあります。このトーラーが、旧約聖書全体を貫く一番大切な原理、神の教えです。もう一つは、モーセの五書。すなわち「創世記」「出エジプト記」「レビ記」「民数記」「申命記」の五つが狭い意味のトーラーで、広い意味のトーラーは神の教えということです。

ユダヤ人は国を失い亡国の民になりましたが、今はイスラエルという国ができて、多くのユダヤ人がイスラエルに帰っておりますけれども、中世ヨーロッパからヒトラーによる大量虐殺に至るまでの長い長い間のユダヤ人の離散の時代において、ユダヤ人がユダヤ人としてのアイデンティティーを保ち得た秘密はどこにあるのでしょうか。ユダヤ人は地上から抹殺せられるような、どうしようもない絶望的な状況の中でしぶとく生き残ったのですが、何によって生き残ったかという点、宗教の力です。すなわちトーラーによって彼らは生き残ったわけです。ですから、ユダヤ教のトーラーというのは何といたしましてもユダヤ教の生命ではないかと思えます。

ユダヤ人はモーセに導かれてカナンの地に入りますが、モーセ自身は「約束の地」カナンに入ることなく途中で死んでしまうわけです。「約束の地」に入ったユダヤ人も神殿を破壊され分断されてしまいます。しかし、ユダヤ人はトーラーの力によって現在まで生き残っているわけです。トーラーというのはまさにユダヤ教の生命ではないかと思えます。

ですからユダヤ教を学ぶ際に、トーラーとは何かということを学ぶべきです。ただ、トーラーを「律法」と訳しますと間違いでありまして、トーラーというのは人間の生き方に関する教えとお考えになっていただければよろしいかと思えます。

今度はキリスト教、イエスのほうに話を移します。

イエスの物語は非常にやさしい。私は世界の宗教の中でキリスト教ほどやさしい宗教はないと思っております。私の本を読まさせていただきます。

神はヨセフの婚約者マリアを懐妊させて、彼自身のひとり子を産ませた。

ここから始まるのではないかと思えます。いわゆる「処女懐胎」ということです。

マリアはヨセフと性的な関係を持たなかった。彼女は処女でありながら、神のひとり子を産んだ。

この言葉を聞きますと、私はオカルト映画を思い出すんです。あるテレビ映画を見ていた時に、悪魔が人間の女性に子供をほらませるシーンがありました。あれはまさにキリスト教の裏の番組ではないかと思うのでありまして、悪魔を神に置き換えれば、そのまま通用するのであります。なぜ神が人間の女性を懐妊させることができるか、私にはわからないのです。いや、わかっているわけではないのです。キリスト教の本質は、理性によって物事を判断してはいけないのです。これはキリスト教の二千年の伝統でありまして、マルチン・ルター (Martin Luther) もそうですし、聖パウロ (Paulos) / キルケゴール (Søren Kierkegaard) もそうですし、テルトゥリアヌス (Tertullianus) もそうですが、キリスト教の本質は、要するに豊かな知性、あるいは理性を犠牲にすることによってのみ成立するということと言えるわけです。

彼女は処女でありながら神のひとり子を産んだ。ヨセフの息子イエスは、三十歳ごろに「神の国は近づいた」という神の福音を伝え、二、三年後に自己の使徒の一人ユダに裏切られた。

十字架にうちつけられて処刑された。

というわけです。

イエスが三十歳くらいまで、どこで何をしていたかということとは全くわからないんです。とにかく三十歳近くにな

りましてから、突然この人は歴史の表舞台に登場して、二、三年間あちらこちらを歩いて、今、申しましたように、「天国は近づいた。汝悔い改めよ」と神のメッセージを説いて回ります。

結局、キリストの関心は、マルコ伝第一章十五節ですが、「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」と、これだけなんです。このことですけれども、まだこの世は終わっていませんね。イエスが死んでから二千年近くたりますが、まだ終わっていないんですね。そうすると、イエスは果たして利口な人だったのか。アフリカの聖者アルバート・シュバイツァー (Albert Schweitzer) は代表的な神学者ですが、彼は「イエスはあまり利口でなかった」と言うんです。とにかく、イエスは「間もなくこの地上は破滅する。だから、おまえたちはすぐ悔い改めて、信じなさい」と言うんです。

キリスト教の場合、処女懐胎を信ずること、それからイエスが神の福音を説いて、二、三年後に自己の使徒のひとりであるユダに裏切られて、十字架につけられて処刑された。この物語を信じ、洗礼を受け、定期的なサクラメントにおいて目の前に出されるブドウ酒をイエスの血であると信じて、これを飲み、目の前に出されるパンをこれはイエスの肉体であると信じて食べる人々は、墓の中から死んで三日後によみがえったイエスによって救われるということ。もし、この物語を信じない多くの人々は永遠の責め苦を受けて、決して救われない。多くのキリスト教徒の信条によれば、人類の大多数は最初から神自身によってのろわれるように予定されている。これがキリスト教の物語であります。私はキリスト教の物語は非常に単純でないかと思えますね。

キリスト教といいますが、二千年以上の伝統があつて、古カトリックがカトリック教会と東方教会（ギリシア正教）に分裂し、さらにカトリックの中からプロテスタントがあらわれ、それ以外にいろいろな流派があります。しかし、少なくとも新約聖書 (the New Testament) に関する限り、私が今申し上げましたことに尽きると思います。キリスト教の物語はこれだけです。それ以外につけ加えることは特にないだろうと思えます。

ただ、一言コメントをつけ加えておきますと、私がいつも気になることは、イエスは女から生まれたということですね。お母さんといいますと、自分に命を授けてくれた人ですので、敬愛といえますか、大切にしなければいけないと思います。ところが、イエスは女から生まれたけれども、おなかは借り物であっておれは神の子である。「女よ、下がれ。汚らわしい」と、バイブルの中で言うんです。イエスは、まあ人間ではないから、人間的でなくていいのかもしれないけれども、やっぱり私は日本人なのでしょう。か、ひっかかるんですね。女から生まれたということは、私にとっては大変神聖なことではないかと思えますけれども、キリスト教の場合には汚らわしいことでありましてね。神の子ですから、女から生まれたということは肉から生まれたことになります。人間は肉ではなくて霊から生まれる。水とパンとブドウ酒、こんなふうになるのではないかと思えます。

日本で人気があるキルケゴールを皆さん方はどのように判断されるか知りませんが、キルケゴールのやったことを一言で言うと、バカげたことを盲目的に信じるということではないのです。

パウロもそうです。マルチン・ルターもそうでありまして、マルチン・ルターは「理性は悪魔の花嫁」であると公言し、クリスチャンたることを欲する者はだれであろうと、自分の目玉の中から理性をえぐり出して捨ててしまえということを言っております。出典は今日用意してきませんでしたけれども、ルター全集を見れば出ています。

そんなわけで、キリスト教は理性を全く信じない。すなわち、それは信仰の宗教であります。ユダヤ教は信仰ではない。それは神と人間の信頼関係、もしくは親密さを重んじ知性を犠牲にすることはいたしません。

二二

次に、話をマホメットのほうに移したいと思えます。

マホメット (Mohammed) は、今、例の『悪魔の詩』でテレビ、新聞で脚光を浴びています。

イスラームに関して最大の権威は、キャンントウエル・スミスという前ハーバード大学の教授です。彼の本がアラビア語に翻訳されて、アラビアの人たちに読まれていそうです。一昔前はギブ (Gibb) が権威だったのですが、最近ではキャンントウエル・スミスが最大の権威でしょう。

マホメットは無学でアラビア文字が読めなかったのではないかと思ひます。マホメットの物語も単純であります。私の本『宗教とは何か』にはこう書かれています。

神の使者であるマホメットは、父の死後に生まれた。彼の母は彼が六歳のときに死亡し、この不幸な孤児は伯父の家に引き取られて養育された。

マホメットはお父さんが死んでから生まれて、お母さんも六歳のときに亡くなって、伯父さんの家で育てていたのですが、伯父さんが非常にやさしい人でよく面倒を見てくれた。ですから、マホメットさんは一生を通じまして孤児や寡婦の幸せを常に考えて、大衆社会改革的な運動をしているのです。彼は悪魔の化身ではないのです。大衆すばらしい人だと思ひ、自分の娘を彼は黒人と結婚させています。マホメットは色を問題にしません。それから、金持ちから税金をたくさん取って貧者に配るとか、民衆の福祉のために一生懸命力を注いでおります。私の好きなタイプです。

二十五歳のときにマホメットは十五歳年上の富裕な未亡人ハデージャと結婚するのですが、この結婚が非常によかったです。彼女は賢夫人でありまして、たしか隊商に携わってお金をもうけ、そのお金でマホメットは自分の生活を豊かにするだけではなくて、いろいろなことを学ぶことができました。

四十歳くらいのときに、彼はヒラー山において神の最初の啓示を受けます。イスラームにおいてはラマザンといて、一年に一カ月の断食の月があります。その月の間、ヒラー山で徹夜するのは彼の習慣でありまして、夢の中で天使のガブリエルはイスラームを「あなたの主の名において普及することをマホメットに命ずる」というわけであ

ります。このようにして彼は唯一のアッラーの啓示を人々に伝えることになったわけでありませう。

マホメットは奥さんと大変仲がよかったです、奥さんが亡くなってから何人かの女性をはべらせ、最後にアイシャという十八歳くらいの絶世の美人を奥さんにしました。これについて大変な問題が起きます。私の本には書いてないのですが、そのことが原因でイスラームは二つに分かれます。すなわち、マホメットの最初の奥さんがハデージャですが、その二人の間に生まれたお嬢さんがいて、そのお嬢さんのお婿さんがイスラームの一つの家系を作りました。もう一つは、マホメットが晩年に結婚したアイシャという美女がいて、この美女と彼の間に子供はなかったのですが、アイシャのお父さんが初代のカリフ（最高の支配者・マホメットの後継者 *Khalfah*）になり、この二つの家系がイスラームを真二つに分断したのです。ですから、恐ろしきは女性ではないかと思えます。

アイシャについては後日談がありまして、マホメットはご承知のように戦争に明け暮れていましたけれども、アイシャはいつも夫に従って戦争に行っていたんです。大変すばらしい女性ですが、ある戦争のときこの美しき奥様が砂漠の中で迷ってしまった。そのとき二十五、六歳の青年があらわれて彼女を救いますが、アイシャとその青年の間に何か不倫の関係があったかかないかという大変な問題が持ち上がる。コーランの中にもそのことは書かれています。マホメットも大変困ってしまって、結局、真相は藪の中なんです、マホメットの最初の奥さんの娘の旦那さんが、アイシャとその青年の間に男女の関係があったのではないかと言うんです。それを聞いたアイシャが怒りまして、復讐の炎を燃やすんです。それも原因でありまして、結局、イスラームは二つに分かれます。日本でいう淀君ではないかと思いますが、とにかくイスラームが分裂したのは、マホメットの先妻の娘と後妻との間の争いに真の原因があります。そういうことは宗教の本に書かれていないんです。そういうところからイスラームは二つに分裂していったんです。

話を戻しますが、金曜日の正午にモスクの広場でイスラーム教徒がひざまずき、メッカに向かって礼拝を行うとき

に、音吐朗々と流れるアラビア語の言葉がありますね。コーランを音吐朗々と誦経しますと、風に乗って聞こえてくる音の響きがすばらしいのであります。

キリスト教のシンボルは、イエス・キリストでしょう。目から来る視覚なんです。十字架がありますね。これを目で見るわけです。これがキリスト教です。

ところが、ユダヤ教の場合は目に見えないのです。だから、「神は肉になった」ということをイスラエルの人は一番嫌うんです。そのかわりユダヤ人が何を発達させたかという耳です。だから、ご承知のように作曲家の中にはユダヤ人が多い。絵画的なもの発達しなかったけれども、ユダヤ人の耳はものすごくいいんです。イスラームのシンボルは、やはり音の響きなんです。ですから、アラビア語でないと本当はコーランを読誦しても効験あらたかではないと言われております。

イスラームの信仰告白について申しますと、「ラー イラーハ」というのは「アッラーのほかに神なし」ということであります。「ムハマッドル ラスール ラーハ」というのは「マホメットは神の使わせたただひとりの使者なり」ということで、実を申しますとこれがイスラームのすべてであります。イスラームというのは非常に単純な宗教であります。これはキャンントウェル・スミスが『他人の信仰』という英語の本で言っております。イスラームというのは「アッラーのほかに神なし」という信仰告白に尽きます。昔は「アラー」と言いましたね。『アラビアンナイト』を見ていますと、「アラー」と言いましたけれども、最近では「アッラー」と言います。これは固有名詞ではなくて、英語の「ゴッド」(唯一神)という意味であります。「アッラーのほかに神なし。マホメットは神の使わしたただひとりの使者なり」という告白が、イスラームのすべてであると思えます。

では、マホメットは一体どういふことを伝えたかという点、マホメットによって伝えられる神のメッセージは、実を申しますとユダヤ教とは全然違ひまして、新約聖書に非常に近いわけです。実際にコーランをお読みになればわか

りますけれども、マホメットが言ったことは「最後の審判および悔い改めの必要性を宣教する」ということでありますので、要するに死んだ後に人は天国（パラダイス）に行くか地獄に落ちるかのいずれかであるということです。善良な人間、すなわちアッラーを唯一の神として信仰する人々、そして良い行為をする人々は死んだ後にパラダイス（楽園）に入ることが出来る。しかし、神の警告に耳を傾けない、アッラーを信じない人は地獄に落ちて、地獄の責め苦を受けなければならないということになります。

ただ、キリスト教とちよつと違ふところがあります。それは、仏教に近づくのですけれども、キリスト教の場合には良い行為は重要ではありません。カトリックでは功德ある行為に若干言及しますが、実際にはキリスト教の場合は信仰だけでよろしいのであります。早い話が人を何百万人殺そうと、ヒトラーとかスターリンのような人でも、死の瞬間に神を信ずれば救われる。行為によるのではなくて、信仰によってのみ人は救われるというわけです。ところが、イスラームの場合には信仰だけではいけません。日常的な行為がここでは問題ですので、イスラーム教徒は良い行為をしなければいけません。そういう点ではイスラームは仏教に近いと思えます。ただ、良い行為だけではいけないのであります。やっぱりアッラーを信じ、アッラーの教えに基づいて良い行為をする人々だけが、死んだ後にパラダイスに行けるわけです。

イスラームのパラダイスはおもしろい。アラビアは砂漠の国ですので、パラダイスはオアシスそっくりなんです。そこには水が流れている。あるいは木があり、木陰があり、年のころなら十六、七の美しい乙女が酒をついでくれるという、大変アラビア的なパラダイスがコーランの中には描かれています。

いずれにしても、パラダイスと地獄が前面に出てくるわけです。

イスラームは一神論でありますので、アッラー以外のいかなる神をも信じてはいけません。それは多神教を嫌います。アラビア語では「シャーク」と言うらしく、キャンントウエル・スミスは「シャーク」を「多神論」と訳しております。

四

最後にブッタ（仏陀）の物語になりますが、これは皆さん先刻ご承知ですので、はしょってお話をいたします。

仏教は宗教としてはキリスト教よりも、イスラームよりもはるかにおもしろい宗教です。私が大変気に入っている宗教は、仏教とユダヤ教の二つです。端的に言うとな法華経と旧約聖書の二つが、私にとって一番気になる聖書ないし教典であります。

仏教につきましては、近いうちに『仏教の思考構造』（すずき出版）という入門書を出版いたしますが、ブッタの物語については特に言うこともありませんので、一言だけにしておきます。

大乘仏教はジャングルみたいであって、宗教学ではちょっと処理できないのです。そこにいきますと、小乗仏教にはトリピタカがあつて、しかも歴史上の人物のお釈迦さんの教えがあり、四諦八正道あるいは縁起は処理しやすいものですから、どうしても宗教学の場合には初期仏教ないしテーラヴァータ仏教を持ってくるのが大体定石です。そこで「四門出遊」が出てきて、結局、我々の人生は無常であつて苦しみに満ちている——そんなふうなスケッチされて、最終的にこの苦しみからどのように逃れるかが問題になります。もっとも「逃れるか」というのは宗教学の用語であつて、仏教的には苦しみを除去することによって、最終的に涅槃に入ることになります。涅槃とは、苦しみがことごとく尽きている状態だと思ひます。

苦しみおよび苦しみを滅すること——この二つがお釈迦さんの物語のハイライトではないかと、私は思ひます。

あるとき京都で行われた宗教学会のとで、ある唯識の学者が酔っぱらってしゃべりまくり、盛んに四諦八正道を強調するものですから、私が口を滑らせてこう言ひました。

「君が四諦八正道と言ひけれども、苦諦はあつてもいいが、滅諦なんかなくてもいいんじゃないか」

彼は怒りまして、

「滅諦がなかったら仏教でないよ」

と、まあ、このように彼は言うんです。

「それはまあ、そうだ。しかし、滅諦なんかなくなっちゃいいんじゃないか」

と、私は重ねて言ったんです。私は半ば冗談、半ば本気でありまして、今度私を書きました『仏教の思考構造』では、滅諦のないような苦諦だけの仏教というようなことを述べてみました。機会があったら、本書をぜひごらんください。

私は仏教に大変関心を持っておりまして、仏教の基本的なテーマ、例えば苦しみとか渴き、あるいは縁起、特に十二縁起あるいは初期仏教におけるアートマンないしアッタンの問題、あるいは大乘仏教の仏身論とか三身説とか菩薩とか、あるいは密教などを扱ってみました。仏教も扱いようによってはおもしろいのではないかと思えます。どうでしょうか。仏教も思い切って発想を変えて、大胆に仮説として提示してみればいいのではないのでしょうか。

余論一 神の問題

神と言いますと、これは西洋の宗教とのかかわり合い、インドの宗教とはまず関係ないと思えます。

神という場合、ユダヤ教にしましてもあるいはキリスト教にしましても、イスラームにしましても、神というものを認めているだろうと思えます。キリスト教の神はちょっと変わっておりまして、化身でありますので、神自身というよりも人間の形をとってこの地上に降下してきた神（アバターラ）もしくは肉になった神というわけで、一〇〇％人間であると同時に一〇〇％神だということになりますので、ちょっと事情は変わりますが、神を認めているという点ではユダヤ教あるいはイスラームと変わらないと思えます。

そこで神ですが、これは至高の存在というか全知全能というか、もっと別の言葉で言うと、天と地と人間、生きと

し生けるものを創造した靈的存在であって、被造物を愛し続けている實在というふうに考えることができるかと思ひます。これがヨーロッパのゴッドである——このように私は思ひます。

ただ、問題は幾つかあります。特に問題になりますのは、もしも神が世界とか人間を創造したといたしますと、この世の中の大きな悪あるいは苦しみを説明しなければなりません。なぜ、神を信じている信心深い人々が苦しまなければならないかということが問題になります。もっと別な言葉でいうと、悪いやつがこの地上で繁栄し、神を信じている善良な人々が苦しみにさいなまれるという事実をどう説明するかという問題が生じます。これが有神論のアカレス隄ではないかと思ひます。

神が人間を作ったとするならば、作った側に責任はないかということです。お恥ずかしいのですが、我が家におきましても子供がいろいろと問題を起こします。その際に、かみさんに言われて私はシュンとします。「あなたの子供でしよう」と言われたら一言もありません。私は最高責任者です。私は子供を作った張本人でありまして、どうしようもない。結局、子供は自分の鏡ですからね。私に最終的な責任がありますよね。

ただし言っておきますけれども、旧約聖書の場合は私の考えに近いのです。ユダヤ教の場合には、善を作ったのも神ならば悪を作ったのも神ですから、神はこの世における人間の苦しみ、あるいは悪に対して最終的な責任をとらなければならない。これがユダヤ教です。

特にヨブ記というのがあり、大変重要なんです。要するに、正しき人がなぜ苦しまなければならないかという神に對するヨブの抗議——それがヨブ記の内容なのです。ヨブによってなされたような抗議が、ユダヤ教の場合なされません。

キリスト教は手を汚さない宗教でありまして、良いことをしたのは全部神であります。悪いことをしたのは悪魔か人間です。神様には責任がない。ですから、人間は罪人（つみびと）です。人間は傲慢、高慢です。だから、神でな

く人間がみずからの犯した罪に対してみずから責任がある。神には何ら責任はないというのが、キリスト教の解釈であります。

イスラームもキリスト教に近いのであります。イスラームという言葉は、アッラーの意思に服従することという意味なんです。神は実在する。これを疑うことは許されない。キリスト教の場合でも、イスラームの場合でも、ユダヤ教の場合でも同じでありまして、神は現実存在するということは疑うことのできない事実です。そこからすべては始まるのであります。

余論二 苦しみの問題

人生には苦しみがあります。イスラームの場合には二つの解決策があります。一つの解決策は、人間は罪を犯したんだから、その罪に対する刑罰を与えられている。したがって、この世における苦しみは、罪に対する刑罰であるということ。もう一つの解決策は、苦しみは訓練あるいは神のテストである。だから、人間の苦しみは神自身の計画の中にあるということなのです。

そうしますと邪悪な人が栄え、善良な人が苦しんでいる人生の事実を人はどう説明すれば良いのでしょうか？「悪いやつほどよく眠る」と松本清張が言いました。私もそう思います。今、悪人（無信仰の人）は繁栄しているように見えるけれども、死後の審判を受けて死んだ後に苦しむ。すなわち、悪人は地獄に落ちて苦しむ。善良な人（信仰している人）は今苦しんでいるように見えるけれども、死んだ後に天国あるいはパラダイスに赴いて、そこで楽しい生活に入る。これがイスラームあるいはキリスト教の考えではないかと思えます。

キリスト教の場合、なぜ苦しむかという点、原罪（the original sin）というのがあって、アダムにおいて犯した罪、それは我々自身の罪であるというわけですので、もし我々が苦しんでいるとすれば、アダムとイブがエデンの園

で禁断の木の実を食べたことに対する報復であると、大変神話的な発想になるわけでありませう。

結局、我々がこの世において苦しむのは、一口で言うところにははかり知ることのできない神の意思であるということになるのではないかと思います。

ただ、ユダヤ教の場合には原罪という発想はないのです。罪というものの考え方はユダヤ教に始まるのですけれども、ユダヤ教はおもしろい宗教でありまして、レオ・ベックの言ったように、各人はおのれ自身の犯した罪に対して責任を持って、おやじとかあるいは祖先の犯した罪に対して各人は責任はないというのがユダヤ教の罪に対する考え方のようです。

ユダヤ教の場合には、おのれの罪というものは白雪のように真っ白になることができるということでありまして、おのれ自身の非行を悔い改めて正しい行いをするならば、おのれ自身の罪は一〇〇％消えてなくなると聖書は言っております。

キリスト教は違います。原罪はイエス・キリストという仲介者の恵み、あるいは温情がなければ許されることとはないというのが、キリストの基本的な立場です。

苦しみの問題は仏教ではどうかということも、私には気になります。仏教の場合、大変深刻な問題がありますが、まず深刻でないほうから片づけておきますと、仏教の場合には罪という言葉は使われたいではないかと思えます。渇きと無知、これは小乗仏教的な発想ですが、一口で言うところには無知であります。正しい知識を持たないから、我々は輪廻転生して苦しむのだということになるかと思えます。だから、無知を滅却すれば我々はカルマ(業 Karma)の法則から解放されるというふうになるのではないかと思えます。

問題はカルマの法則ですけれども、これは一度再検討しなければならぬと思えます。例えば、キリスト教の場合には、アダムにおいて犯された罪は子々孫々に至るまで遺伝して、我々もそのアダムの罪ゆえに苦しまなければなら

ないというのがキリスト教の原罪の觀念であると思いますが、仏教とかヒンドゥー教の場合には輪廻転生もしくは業（カルマ）の思想があります。今、我々が苦しんでいるのは、前世において我々によって犯された悪い行為の果実を今我々が受けているというのが、仏教的思考であります。裏返して申しますと、今我々が苦しんでいるのは、あくまでも我々自身が前世に犯した罪ゆえであり、無実の人はひとりもない。つまり人間は一〇〇%カルマの法則の支配を受けているということになりますので、これは大変深刻な問題を我々に提供します。このカルマの法則を疑う人はあまりいないと思いますが、数年前新聞で見ましたが、ある仏教詩人がカルマの法則というのは残酷ではないでしょうかという形で、この法則を疑っておりました。しかし、彼によって疑われたのは、主として小乗的なカルマの法則であります。

大乘仏教になりますと、菩薩の功德が生きとし生けるもの、あるいは万人に移讓されるということになりますので、カルマの法則もかなり緩和されると思いますが、カルマの法則が消えてなくなつたわけではないわけです。苦しみあるいは悪の問題を考える際に、どうしても問題にしなければならぬのは、果たして我々は前世において悪い行為をしたかどうかということです。何しろ前世の記憶はないわけですからね。密教的に言えば、人は前世の生活を思い出すことができるのでしょうかけれども、普通はそういうことはありません。この問題をどう考えますかね。私はこのことを皆さんにぜひ考えていただいで、ご布教される際に一つの解釈を出していただきたいと希望しておきます。カルマの法則は大変深刻な問題を提示します。

余論二 ニーチェとユングの言葉

最後になりましたけれども、そして直接バイブルと関係はないのですけれども、私がいつも考えている問題の一つですので、特に最後にこのことについて一言お話をさせていだきたいと思ひます。

つまり、宗教に関して大変深刻な問題がありまして、それは何かと申しますと、一つは二十世紀というものは、ニーチェの死とともに始まると考えることができるかということです。ニーチェが死んだのが一九〇〇年です。ニーチェの死はまさに一九世紀の終わり、二十世紀の始まりなのです。

ニーチェの「神は死んだ」という言葉はだれでも知っている言葉ですけれども、過去二千年のキリスト教の神話の帝国が崩壊したということを、それは意味すると私は思います。すなわち、神の死は神話 (Myth) の死であります。そして、神話の死は科学および歴史の勝利であります。ニーチェの「神は死んだ」という言葉は、巨大な意味を持つと思います。

この系統に属するのは、一人はマルクス (Karl Heinrich Marx) もう一人はフロイト (Sigmund Freud) です。マルクスの考えは間違っていると思いますが、マルクスは思想的にはニーチェの無神論の系譜に属しますので、一言だけ申しますと、「宗教は民衆のアヘンである」という彼の大変有名な言葉があります。

フロイトに言わせると、「宗教は子供の脅迫神経症 (ノイローゼ) である」ということになります。フロイトの考えが正しいかどうかは別として、「人類は宗教から離れて新しい旅立ちをしなければならぬ」というフロイトの言葉に、我々は耳を傾けねばならないと思います。

非常に極端ではありませんけれども、無神論は恐らく二十世紀の代表的な思想の流れの一つに違いないと思います。こういう考え方の中で特に注目しているのは、ニーチェの「神は死んだ」という宣言だと思っています。

心理学者のカール・グスタフ・ユング (Carl Gustav Jung) と宗教学者のミルキア・エリアーデ (Mircea Eliade) の二人は親友ですが、この二人の考え方は、おそらく今のヨーロッパおよび日本において一番支配的な考え方ではないかと思えます。

どうということかといいますと、ユングの言葉で申しますと「神話のない宗教はあり得ない。我々の運命というもの

は永遠の神話 (eternal myth) に帰らなければならない」ということです。これは一体どういうことかというところ、ワンス・アポン・ア・タイム (once upon a time) “昔々、ある時” というおとぎ話の世界あるいは神話の世界が子供の見る夢ではなくて、現実到我々が今ここに住んでいる世界よりもはるかにリアリティーがあるということなのです。同じことをエリアーデも言っております。

要するに、我々の体験している時間は、汚された世俗的な時間であって、偉大なる時間というものは、その中にいて物事が生ずることのない時間である。この地上において生ずるさまざまな出来事、私がここでお話をしております、皆さんが聞いてくださっております、どこかで子供が生まれたり、あるいは会社でだれかが机に向かって、そういうようなこの地上において生ずるもろもろの出来事は、最終的には非現実的である。それは夢であり、幻である。そうではなくて、神話の中において起こること、それが本当の現実なのだ、ということを経験する人はエリアーデは主張しているのです。したがって、エリアーデに言わせると、「我々はそういうような現象的な世界に入らなければならない」ということになるわけです。

ユングあるいはエリアーデの言葉を聞きながら、私は法華經のことを頭に思い浮かべております。つまり、この地上の生活を我々はどう考えるべきかということです。如来寿量品に、

我は世の父、自在者なり。

我亦為世父

生きとし生けるものの救い主なり。

救諸苦患者

倒錯し迷い、愚かなる者を見ては、

為凡夫顛倒

不滅なれども滅を示す。

実在而言滅

とあります。我々の現実の世界において行われる出来事を法華經の作者はどのように理解しているかということが、私には大変気になります。

そんなことを含めまして、今日は旧約聖書に限定できませんでしたが、**「聖書と仏教」**というテーマで、**一応、聖書とは何かという問題について、ある程度考えて発言させていただきました。ご清聴、ありがとうございます。**
た。(拍手)

※本稿は、平成元年一月二十一日に現宗研主催で行った現代宗教学研究セミナーにて講演されたものを筆録したものです。